

令和7年度 川崎市総合教育会議 会議録

日 時：令和7年10月7日 火曜日 13時30分～14時54分

場 所：川崎市役所本庁舎 101会議室

出席者：

福田 紀彦 市長  
落合 隆 教育長  
芳川 玲子 教育長職務代理者  
野村 浩子 委員  
森川 多供子 委員  
西井 孝明 委員  
坂口 緑 委員

理事者

○総務企画局

池之上局長  
神山都市政策部長  
山井都市政策部企画調整課長  
加島都市政策部企画調整課担当課長

○教育委員会事務局

田中教育次長  
岩上教育政策室長  
佐藤総務部長  
北川学校教育部長  
植村学校教育部担当部長  
大島生涯学習部長  
大野総合教育センター所長

傍聴者数：5人（報道関係：0社）

※ 読みやすさ等のため、文意を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

神山総務企画局都市政策部長 それでは定刻になりましたので、令和7年度川崎市総合教育会議を開催いたします。

初めに、福田市長から御挨拶をお願いいたします。

福田市長 皆さん、こんにちは。大変お忙しい中、総合教育会議に御参加をいただきまして誠にありがとうございます。

今日の総合教育会議のテーマであります、一番大事なのが教育大綱策定に向けた考え方をしっかり整理するということ、それからこれまで次期教育プランの策定に向けていろんな御議論をいただいていたと思います。今後の川崎の教育のあり方ということで、各委員みなさんが相当思いを持っていろいろ御発言いただいていたと思いますが、そのことを改めて皆さんで確認し合いたいというふうに思っております。短い限られた時間ではありますが、活発な議論をいただきますようよろしくお願いいたします。

神山総務企画局都市政策部長 ありがとうございます。総合教育会議は、地方公共団体の長であります、市長が招集、主催することとなっておりますので、この後の進行につきましては福田市長、よろしくお願いいたします。

福田市長 それでは次第に従いまして協議・調整をお願いいたします。

本日は2つの議題について議論をしていきたいと思っております。1つ目の議題ですが「次期教育大綱策定に向けた考え方について」でございます。

それでは、事務局から資料の説明をお願いします。

事務局 資料の1「次期教育大綱策定に向けた考え方」を御覧ください。

1枚おめくりいただきまして、本市におけるこれまでの教育大綱の取り扱いについて、でございます。

この間、平成27年の第1期教育プラン、平成30年策定の第2期教育プラン、それから令和2年3月策定の第3期教育プランをもって、教育大綱としてこれまで位置付けてきたところでございまして、今年度は教育大綱と、それを兼ねた第3期プランともに最終年度ということになっております。ページ下部に、参考としまして根拠法令を示してございますが、地教法の第1条の3で市長が大綱を定めるものとされておりました、2項で大綱を変更するときは、教育総合会議で協議するものとされております。

その下の通知で、①の部分でございますけれども、地方公共団体で、教育振興基本計画、教育プランですが、これを定めている場合で、総合教育会議で協議・調整し大綱に代えることとした場合は、別途大綱を策定する必要はない、ということとされております。

次のページをお開きください。

今回策定する、第3次川崎市教育振興計画かわさき教育プラン第1次実施計画をもって次期教育大綱に代える理由といたしましては、①次期教育プランは、本市の教育が目指すものなどを定めた、本市の教育施策の根本となる行政計画であること。それから、②総合計画第4次実施計画と整合を図りながら策定を進めていること。それから③として、次期プランは、議会や市民の意見を踏まえて策定されたということを意図しています。

最後に策定スケジュールでございますが、本日10月に大綱について協議させていただいた後、中段でございますが、次期教育プランの素案を11月に公表しまして、パブリックコメントを経て、来年3月に策定し、それをもって大綱とする予定としております。説明については以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。それではこの件につきましては現在の教育大綱と同様に、今事務局から説明のありました通りにさせていただきたいと思っておりますけれども、よろしいでしょうか。

(異議なし)

はい、ありがとうございます。それでは今年度策定いたします「第3次川崎市教育振興計画 かわさき教育プラン第1期実施計画」をもって次期教育大綱に代えることといたします。

それでは、議題の2つ目「次期川崎教育プラン策定に向けて」に移りたいと思います。事務局から資料の説明をお願いします。

事務局 はい。資料2を御覧ください。次期教育プラン策定に向けた検討について御説明いたします。

次のスライドを御覧ください。

次期プランの構成でございます。図の通り、「めざすもの」と「みんなと共有したい価値観」を掲げ、具体的な取組である「実施計画」と、重点的に取り組む「Key Project」で構成してまいります。

次のスライドを御覧ください。

ここからは「Key Project」の検討状況を御説明いたします。初めに「Key Project 1 探究的な学びの充実」でございます。

次のスライドを御覧ください。

次期かわさき教育プランに向けた考え方で示した、社会参画に向けた資質・能力を育成する探究的な学びの充実を、次期プランではかわさき探究2.0として、地域に学び地域にかかわる「探究的な学び」を実践し、行動につなげてまいります。

次のスライドを御覧ください。

取組の概要でございますが、更なるバージョンアップと全体的な底上げの取組を分けて整理し、モデル校での取組と、かわさき探究2.0を実現するための取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

ここから、モデル校での取組を説明してまいります。モデル校では、学習テーマを地域資源として、地域の魅力や課題をテーマとした活動を実施し、地域社会への参画に繋げてまいります。

次のスライドを御覧ください。

また、探究に集中できる時間割として、学校や地域の実態に応じた学習計画を立てることができ、連続・発展的な探究サイクルを確保できるようにする取組を行ってまいります。具体的には、4・5月を単元作り期間、6月から総合で探究的な学びの実践を行う単元づくり期間の確保や、次のスライドにまいりまして、学年ごとに探究DAYとして、総合的な学習の時間の曜日の設定を行ってまいります。

次のスライドを御覧ください。

また、地域の小・中学校の連携では、学校間で学習内容等の情報を共有し、学びの連続性を確保したり、下の、「地域と共に目標、学習内容を共有」では、学校運営協議会等を活用した地域への説明などにより学校と地域がともに学び、ともに課題の解決に向かう関係を目指してまいります。

次のスライドを御覧ください。

スケジュールでございますが、モデル校の実施状況等を踏まえて、令和10年度から全校展開してまいります。

次のスライドを御覧ください。

「Key Project 2 切れ目のない支援」でございます。

次のスライドを御覧ください。

プロジェクトの背景として、特別支援学校等の在籍者や不登校児童生徒が増加し、一人ひとりに合った支援を行うためには、学校だけで対応することは困難な状況となっており、発達段階等に応じた切れ目のない支援などが課題となっています。

次のスライドを御覧ください。

プロジェクトの方向性ですが、児童生徒一人ひとりの適切な把握、情報の共有化、多様な主体との連携を3つの柱として、4つの方向性に基づき取組を進めてまいります。

次のスライドを御覧ください。

「方向性1 個別の支援計画を軸とした連携体制等の整備」でございます。支援が必要な児童生徒の増加や状態、ニーズ等の多様化などにより、より適切なアセスメントと支援計画の作成、情報を継続的に共有できる体制が必要であることなどから、客観的かつ継続的なアセスメント等の実施や、情報共有による支援の連続性の確保を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性2 多様な学びの場の確保と安全・安心な居場所づくり」でございます。別室指導における人員配置やオンライン学習システムに課題があることなどから、児童生徒一人ひとりに応じた多様な学びの場の確保や、関係局と連携した児童生徒の居場所作りを検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性3 保護者の安心につながる支援等の充実」でございます。保護者に必要な情報が届かないことにより、保護者の孤立や、適切な支援につながらない等の課題があることなどから、分かりやすくアクセスしやすい情報提供や、関係局等と連携した保護者支援の実施を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性4 学校教職員の取組を支える環境の整備」でございます。教職員の知識や専門性の維持向上の必要性があることなどから、教職員の専門的知識やスキルの向上に向けた研修の充実や、専門職等によるサポート体制の強化を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「Key Project 3 教職員が働きやすい環境づくり」でございます。

次のスライドを御覧ください。

次期プランでは、学校との意見交換会の結果を踏まえた、次期「教職員の働き方・仕事の進め方改革の方針」において、4つの対応の方向性を定め、取組を進めてまいります。

次のスライドを御覧ください。

取組の概要でございます。4つの対応の方向性に基づく取組を実施し、子どもと向き合える時間の増加や、時間外在校等時間の縮減、能動的な学びへの転換を実現してまいります。

次のスライドを御覧ください。

「方向性1 教育課程の編成による創造的な余白づくり」でございます。教育課程を工夫し、放課後等の時間を創出することで、教員の時間的余白を生み、子どもと向き合う時間や能力向上の時間に充てるための取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性2 教員の負担軽減・業務軽減」でございます。人材の安定確保と教員の働き方改革を一体的に進めることで、相互に好影響を与える仕組みを構築し、持続可能な学校運営体制の構築を目指した取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性3 児童生徒主体の学びへの転換」でございます。教育の質を高めていく授業改善の取組でござ

いまして、実践例のような、「一人ひとりの子どもが主語の端末活用」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向けた取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性4 しくみづくり・環境整備・人材確保の取組」でございます。学校現場との意見交換を踏まえ、教職員が働きやすい仕組みと環境を整備し、人材の安定確保を図る取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

スケジュールでございますが、業務改善実践校を段階的に拡大し、全ての市立学校へと広げてまいります。

次のスライドを御覧ください。

Key Project 1と3の関連でございますが、人材確保と働き方改革の取組を両輪で進め、教員の業務負担を軽減することで、児童生徒の資質・能力の育成につながる好循環を生み出してまいります。

次のスライドを御覧ください。

「Key Project 4 学びと学び合い社会の実現」でございます。

次のスライドを御覧ください。

プロジェクトの背景としては、変化が激しく将来の予測が難しい時代を心豊かに生きるためには、生涯を通じて学び続けること、学び合うことで、よりよい社会づくりが期待されています。

次のスライドを御覧ください。

プロジェクトの課題としては、2段落目、いつでもどこでも様々な形で取り組みやすい生涯学習環境の整備を進めていく必要があることや、最後の段落、社会教育と学校教育のそれぞれの強みを生かした深い学びの機会の充実などでございます。

次のスライドを御覧ください。

プロジェクトの方向性としては、いつでもどこでも様々な学びに触れられることや、学びを活かして様々な形で活躍できることを目指し、実現に向けて、生涯学習の充実による「学び」の推進や、「学び合い」を通じた緩やかなつながりづくり、学校と連携した教育活動を進めてまいります。

次のスライドを御覧ください。

「方向性1 生涯を通じた学びの環境の充実」でございます。主な取組として、2項目目、市内全域を学びの場に、として、市内全域にアウトリーチすることによる身近な場所での学びの場づくりなどの取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

「方向性2 学び合い社会の実現に向けた仕組みづくり」でございます。主な取組として、1項目目、活躍の機会を創出として、活動に関わる人同士の「学び合い」につながる場などの展開や、活動したい市民の活動をマッチングできる仕組みの構築などの取組を検討しております。

次のスライドを御覧ください。

Key Project 1と4の関連でございますが、図のように、探究的な学びの充実と学びと学び合い社会の実現を関連させて、社会教育と学校教育をボーダレスな関係にしてまいります。説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございました。それでは、皆様から意見を伺っていきたいと思います。先ほど教育プランを大綱に代えるということで御決定いただいたと思いますが、故に今回の場合すごく大事でして、次の総合計画だとか、あるいは予算に係ることをどううまく調和させていくかという意味での協議・調整ということになりますので、教育委員の皆様がどういったところに課題や関心を持たれて、どこに重点を置いているかということについて、思いをそれぞれコメントいただければ大変ありがたいなと思います。どなたからでも結構ですのでよろしくお願い申し上げます。

それでは西井委員からお願いします。

西井委員 教育大綱として反映しうる内容かという観点では、まず私はできている、というふうに思っております。その理由ですけれど、これまで川崎市が力を入れてきました教育理念と、それから基本方針の良いところが力強く継承するプランになっていると思います。

その上で、今回の教育プランについて言うと、令和20年に向かって何をを目指すのかということをも明記している、そういうプランになっていると思います。今、Key Project ということでも事務局から説明がありました。たたき台になる施策については非常にチャレンジングな内容になっていると思います。これをどういうふうに行うかということについては、まだ課題があるものの、大綱に代えるということについて言うと、その条件は満たしていると思います。求められるプロセスの中で、大勢の市民の方に参加いただいた対話、それから、アンケートの中で現在の教育理念になっている「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」という言葉が、私が想像した以上に市民の皆様に浸透しているということが分かり、そして高く評価されているということもアンケートの中で確認がされている。したがって、理念に則したプランになっている。現時点での新たに課すべき課題について踏み込んだプランである以上、大綱にしていくということに強く賛同したところです。

市長 ありがとうございます。他はいかがでしょうか。それでは、坂口委員いかがでしょうか。

坂口委員 ありがとうございます。今、御説明にあった通り、次期教育プランの策定に向けてということではありますが、私達はこれまで検証してきたことが何なのかということも確認しました。同時に、今、御説明のあった Key Project の観点では、本当に今現場で困っていることが何度も何度も議論される中で、これを何とかまとめて分かりやすく具体的な施策として出していこうということで、中身について深く議論する機会というのを今回引き受けさせていただきました。

何故そのようなことになっているのかということ、改めて総合教育会議があるということで考えてみたんですが、一つは、子どもや親というのは具体的であるけれども、地域というのが具体的ではないということに気がつきました。地域にとっても頼っている今回の Key Project です。1番も4番もそうです。でも、地域って、自然発生的にできてるものじゃないんだな、ということを改めて思いました。教育というのは確かに学校現場でもあるんですけど、私の専門分野は社会教育・生涯学習ですが、大人、しかも子どもを育てていないかもしれない、育て終えたかもしれない、まだこれからかもしれない方々も、川崎市民としてこの地域をつくっていく一人なんです、そういった方々にどうやってリーチしていくのか、みたいなことを考えていかなければならない、そのことを改めて理解しました。都市部においては、偶発的にここに住んでいる訳ですが、学校を中心に、あるいは地域を中心に教育を展開していこうというような観点が、地域に関わるきっかけというのを提供するというようなことを、このプランというのは明確に示しているなということも改めて理解しました。

市長 野村委員、いかがでしょう。

野村委員 ありがとうございます。私も今回の Key Project の中では、探究というところに非常に大きな期待を寄せています。ただその一方で、探究について懸念していることもあります。探究的な学びが、大人がやって欲しいようなことを子どもが汲み取って進めるような形になってしまうということは、一番避けたいなと思っています。探究の原点というのは何なのか、というところに立ち戻ると、子ども自身の内側から湧き起こるパッション、知りたいとかやってみたくとか、そういった気持ちが芽生えるのを信じて大人が仕掛けて待つという、このような環境があるからこそ、真の探究を育てられると思うんですね。そして探究から芽

生えた学び方というのが他の教科や学校の仕組みにも波及していつて、子どもが真ん中になっていくといことを信じて、私はこの探究に期待しています。

私はこの2月に、長野県の伊那市にある伊那小学校に視察に行ってきました。どんな学校かと言いますと、実に40年以上も前から探究に取り組んでおりまして、動物を実際に飼育してその動物を題材にして、子どもたちが本物に出会いながらお友達とパッションを湧き起らせながら授業を展開しているという学校です。60年近く通知表がなければチャイムもないという独特の学校でして、それでもここに教育移住をしたいという人がいて集まってくるんですね。何故この地域には、こんなに地域と結びついた学び方がずっとあって、絶えず支持されているのか、ここに私達川崎市も何かヒントが得られるんじゃないかなと思って見に行った訳なんです。

実際に見てみて、大人たちが授業を展開していく時に、よく「狙い」という言葉を使うと思いますが、授業の「狙い」ではなくて、子どもたちの「願い」は何なのか、「求め」は何なのかというキーワードを中心に授業を展開しているというところが目から鱗でした。そして、その本物を目の前にして湧き起こったその子どもたちの探究心や、目をキラキラさせているのを見ると、それこそ本物だということを大人が実感せざるを得ない。そして、その学びを得た子どもたちが伊那で大人になって、保護者となって、また、そこに住んでいる人だったり伊那の教育に惹きつけられて住んでいる地域の人たちが、また子どもたちの学びを支えるために、地域の伝統の料理を教えたり、地域の子どもたちと一緒に動物を飼育してみたり、人材の循環が起きているということも一つあるな、と思いました。ですから、川崎でもこの探究をやっていく上で、ぜひ大人たちの「狙い」に子どもが振り回されるのではなく、子どもたちの「願い」を中心にすることによって、そして教育に惹きつけられた大人たちによって子ども達が支えられて、そして子どもがまた大人になって、川崎市民としてのプライドを持ち、川崎を好きで、そして支えていこうという循環が自然に生まれていくということが、探究が真に狙っていくべきところなのではないかと思っています。そういった形で探究が発展していくことを期待しております。

福田市長 ありがとうございます。森川委員いかがでしょうか。

森川委員 ありがとうございます。私も今回こちらに関わらせていただいて、地域とは、探究とは、いろいろと考えさせていただきました。方向が明確であるほど共感する人が集まってきてくださると思いますので、そういう意味ではとても分かりやすくまとめてくださったなと思っています。

あとは、私が気になっているのは、これを実際現場に持っていったときのことです。現場で、探究的な学びをやりましようとした時に、これを現場の先生方に理解していただいて、子ども達に持っていくまでにどのような形になっているのか、様々なケースが考えられると思うんですね。例えば、小中と不登校だった子は高校に行ってこれに関わる訳です。その子には、どのようにして高校から関わらせたらいいのだろうか。また、小学校で学ばなかった場合には中学校でどのように関わらせたらいいのだろうか。きっと現場でやりながら様々な問題が出てくると思うので、その辺のことを提案しただけではなく、振り返りとして一つずつ同じ立場の方たちが共有し合って、「こんな方向性だったら入っていったよ」など、どんどん深めていただけたら、取り残すこともない探究的な学びになるのではないかと思います。実用段階の事を思うと楽しみであり、心配でもあると思っています。

あとは地域の難しさ。先ほど坂口委員もおっしゃっていましたが、本当に地域って難しく、偶発的にここに住んでいた人達というのは、まさにその通りで、いろいろな考え方がいらっしゃり、一つにはまとまらないと思います。また、川崎市は、細長く7区に分かれているので、それぞれで特徴がかなり違うと思うので、それぞれの地区の自治会やいろいろな会の方たちと連携し、この地域やこの学校区にはどのような形を持っていったらいいかということについて話していくと、もっと地域の御理解が進むのではないかと思います。

ます。中学校区ごとにいろいろなことを計画として立てており、お祭りなども違いますし、そういったことに関わっている方たちはメンバーもかなり違うんですね。なので、中学校区ごとに話をおろしていくと、教育委員会はこの地域にちゃんと根付かそうしているんだということを御理解いただけるのではないかなと思っています。もっと地域の方に身近に分かっていただけることが、細やかな活動につながるとと思っています。

福田市長   ありがとうございます。芳川委員お願いします。

芳川委員   この次期教育プランを考えた時に、川崎ってどのようなキーワードを当てはめることができるのだろうか、と考えていました。まず、最初に思い浮かんだのが、「歴史」です。宿場町としての歴史であったり、そういった歴史ですね。次に浮かんだのが「産業」です。多くの産業があって、多くの企業関わっていて、最先端の技術がここに集約されております。そして3つ目は、「文化芸術」です。本当に素晴らしい設備があったりして、そのあたりは全部川崎市の特徴だなというふうに思います。

次に考えたのは、このプランは10年から12年かかりますので、10年後の川崎はどうなるんだろうということです。少し人口の動向を調べたりしてみたんですけど、20年後にはおそらくだんだんと下降気味になっていくと思いますが、10年12年ですとちょうどピークになって、下がっていくような人口動向、今の感じだとそんな感じなのかなと思っています。また、今年度も新しい小学校が開校したりしていることも考えますと、川崎市は実は日本の中でもそれほど急速に高齢化が進む社会ではなさそう、もう少し緩やかなかなと思いました。そう考えると、10年後、12年後は結構まだ若さがある都市になっているのかなと思います。ただし、少しずつ小学生とか中学生の人口が少なくなっていくから、そうすると他のところでは学校の統廃合や、もしくは非常に集中的に駅の周辺に街ができたりとかっていう感じになるかと思っています。

その中で私達がこの次期教育プランで何を考えたらいいいのかということを考えたときに、この4つのKey Projectはとても良くできているなと感心して見させていただきました。私は教育が専門ですので、私の見方で考えていきますと、例えばプロジェクト1は探究ということですが、これは実は教育に対するチャレンジなのではないかなというふうに思っているんです。これから先、教育というものがとても大きな転換を迎えることになってきて、伴走型支援というふうに言われるようになっていくと思います。今までの教え方ではなくて、いかに子どもたちの成長をサポートしていくか。そうすると、今までの教え方では課題や壁ができてきているので、私たちはこの12年間を通して、一生懸命に教員の教え方や教育力を育てていく必要があるのかなと思います。そこで初めて子どもたちの探究が出てくるのかなというふうに思います。そういう意味でこの探究は、伴走者としての教員の成長が必要というふうに思いました。そうすると、働き方改革とも関係があるというふうに思っていて、プロジェクト1とプロジェクト3というのはつながっているものと私は感じています。

プロジェクト3にいきますと、これから先の大きな課題として、どうやったら質の良い教員を多く確保できるか、ということがあると思います。働き方改革というふうに言っていますが、いろいろ声をかけたりなどをしているだけではもしかしたら足りないかもしれないという感じがしています。教員が川崎で成長できたという思いや教師をやっていて良かったという生き甲斐など、そういうものを働き方改革の中にさらに足していくことはできないかなと思っています。教員自身のリスクリング、どうやったら教えながら自分自身の資質が向上できるのか、これを更に働き方改革の中に入れ込むことができると、生き生きとした教育ができるのではないかなと思います。

子どもの数が少なくなりますので、プロジェクト2の切れ目のない支援というのはとても大事なんです、ここで川崎市がグリップして出せるのは、市長が出された「Colors Future」ですね。つまり、多様性と多文化性が川崎の売りなのではないかなと思っております。非常に苦労してきた歴史があるんですが、それを逆手に取ることによって、日本の中ではより先進的にそこができるかなというふうに思いますので、そうなっ



てくると、単なる切れ目のない支援だけでなく、もうちょっと積極的に多様性・多文化性を取り入れることができるというふうに思いつつ、これが次期のプランになればいいなと思っています。

最後に社会教育なんですけれども、企業との連携というところがすごく大きな売りだと思っていますので、大人全体のリスクリングというのが企業と、そして、例えば小中高生と企業とが一緒に研究ラボのようなものやっていると、先ほどおっしゃっていた教育と社会の結びつきということもできるのかなと思います。そう考えるとものすごく展開性がある面白いなと思います。以上です。

福田市長 ありがとうございます。それでは教育長お願いします。

落合教育長 よろしく申し上げます。私も学校現場では、学校経営方針を職員に示すにあたって、教育プランをすごく参考にしていたところがあります。今回新しい教育プランになるということで、これから12年間、先の長い計画全体を通して、川崎市の教育の指針となる考え方を示していく中で、Key Project を中心によくまとまっているなというふうに感じております。それだけ議論をされてきているんだなということを率直に感じました。

これからの学校教育という観点でいくと、本当に時代がめまぐるしく変わってきて、先が見通せないと言われていますよね。だから、子どもたちが目の前の出来事などに関心を持って、課題に感じたことを自分でもしっかり考えを持ちながら、他者と協働して解決していく力とか、学んだことから新たな価値を創り出していく、そういった力を育成することが求められています。そういった中で、本当に子どもたちがやりたいとか夢中になれることを見つけて、そこで粘り強く取り組んでやり遂げたことが自信になるし、学ぶ意欲にもつながるので、そういった教育をしていかなければいけない。そうなったときに、やはり教員の資質の向上とか、教員の指導力というのものがすごく求められてきているのかなと感じます。

多様性という話がありましたけど、支援を要するお子さんもいるが、一人ひとり良さがあるので、その部分に寄り添った関わり方をしていかななくてはいけないし、不登校気味のお子さんが学びたいと思った時にすぐ学べる環境を作って一緒に学んでいくようなこともやっていかなければいけない。そういうところで、やはり教員の指導力って大切だなと思っています。教師が、これから頑張らなきゃいけない、子どもをしっかりと成長させていかなければいけない、という志を高く持って、やりがいを持って取り組むためには、教師は忙しいと言われているので、やはり子どもと向き合える環境作り、いわゆる働き方改革じゃないですけど、そういったことも教育委員会としてはしっかりやっていかなきゃいけないのかなと感じております。子どもたちにとって学びやすい環境、大人にとっても働きやすい環境を作ってあげるという点では、Key Project 1、2、3は、すごくまとまっているのかなというふうに思いました。

それから生涯学習。人生100年時代なんてよく言われていますけども、本当に時代の変化に柔軟に対応しながら、一人ひとりが大人になっても学び続けられるような環境を作ってあげなければいけない。地域における生涯学習の役割というんですかね。そのためには人づくりや地域づくりなど、生涯学習社会の実現に向けてやっていかなければならないと。学校と地域の連携とか、社会施設とか、あるいは文化財の保護活動も含めてどうやっていくかというあたりがKey Projectにも、まとまっていると感じましたので、これが本当に学校現場に降りた時に、どうそれを読み取ってやっていただけるのか、どう活用していただけるんだろうかというあたりもしっかりと見ていかなきゃいけないなというふうに思っています。

福田市長 ありがとうございます。先ほど野村委員からお話をいただいたところ、子どもたちの目が輝いていたとおっしゃっていましたが、おそらく教員の目も輝いていたのではないかなと思います。やっぱり子どもたちが楽しい、嬉しい、学びたいというのは教える側も嬉しいし、輝いているからそこに巻き込まれていくんじゃないかと思うんですね。そういう意味では、どうやって素晴らしい資質のある教員をさらに高め

ていくかという人材育成というようなものは必要なんだと思います。どちらがどうという話ではないんですけど、時間的に忙しいということよりも、なんというか、やりがいを感じているとか、あるいは芳川委員がおっしゃったように、自分が成長できているという、そっちの方に非常に喜びを感じるということなので、ワークライフバランスということで、今日も朝のニュースで OECD の中で最も長時間みたいなことをやっていましたけど、確かにそうなんだと思います。長時間労働者を減らす、これも大事です。だけど、だからといって、それが生きがいだとか、やりがいだとかにつながって、教員がみんな目を輝かせるかというのと、そうではないと思うので、より気づきになる、自らの成長につながるようなそういったプログラムを組み入れていかないと、持続可能な教育現場は生まれてこないのではないかと思います。

それから坂口委員がおっしゃって、そうですねと共感したのが、やっぱり地域って何を指しているのか、地域といったって漠然としていて、人がいないぞ、というのは本当にそう感じます。嬉しいことに共働きが増えていて、川崎市はM字カーブというのはほぼなくなり、フラットになってきました。そういう意味では諦めることをしなくてよくなったということですけども、地域の人はいなくなるということは当然ですし、高齢者の労働人口というのも劇的に増えていますから、そういう意味では、どこに人がいるのかというほどいなくなる。担い手がなくなるという中で、野村委員がおっしゃった言葉で、すごい素敵だなと思ったのは、人材の循環ですね。個々の忙しい中でも、そこに関わることが楽しいという仕掛けや価値というのを作り出さないといけない。何となく義務でやる、地域の中で生きていくには何か貢献しないと何となく住みづらい、みたいなそういうマイナススパイラルではなくて、自らも地域に住んでいて良かったなというふうに関わり取れるような、循環の仕組みというのをうまく作り出さないとなかなか難しいと非常に思っています。そういう意味では、これは教育委員会あるいは学校だけではなく、市長事務部局のいろんなプログラムだとかをどうやってうまく連携させていくかということを考えないと、皆で一針ずつ出し合っていると、ものすごく疲れることになるので、重なり合いの中でどう最小の力で最大の効果を生むのかということが、こういった人材の循環というものを作り出していくということなのではないかと思います。今回の Key Project 1 の探究的な学びというのは地域なくしてはあり得ないものなので、この一丁目一番地をどう連携をさせていくのかということになってくるのではないかなと皆様の発言を聞いて思いました。

ここからも更にまた自由に御発言をいただきたいと思います。西井委員お願いします。

西井委員 川崎市の特性、地域をどういうふうにかえるかと言うと、過疎の進行している地域とは全く違う状況の中で、今回目指しているところの「一人ひとりが輝き、共に未来をつくる」というメッセージに仕上げていただくにあたって、私がぜひこういう考え方でやって欲しいと申し上げた意見を紹介させていただきたい。川崎で教育を受け、そして育った子どもたちが、将来社会に出て、仮に川崎を離れていても、心の拠り所として川崎を思う、川崎って素晴らしいんだ、こういう経験をしたというのが自分を形成している、そういうことをそれぞれの場で発信ができる。そのような人たちを接点にして、川崎に関心を持ってくれる人達が集まってくるというプラスの循環。こういうことをやっていいんじゃないかなと思ひまして、ぜひこの「共に未来をつくる」というのをこの先も考えて欲しい。

そして教職員の方の資質ということについて言うと、やはり能力開発が絶対必要だと思いますし、それから先ほどの「人生の礎を作る」ということについて先生方は非常に努力されているし、8割の方が賛同しているということは、よくやっていると思うんですね。ところが、そうでないという方が2割いらっしゃるって、様々な課題に対して言えることだと思いますが、どこにも対処しきれないでいるということもやりがいを少し下げることにつながっているのではないかなと思うんです。満足していらっしゃる8割の方々を、どう維持あるいは増やしながら対処していくかっていうところにすごく悩んでいらっしゃるし、そこに時間がかかっている。

人とか組織というのは、大きな成功事例を持ちながら新しいことをしていくというのは非常に難しいです。

それを乗り越えていくためにはやっぱり教育現場に多様なキャリアを入れるしかないと思います。具体的に言うと、「Colors Future」で進めてこられた川崎の特性を生かして、これまでのような単に様々な方々がいらっしゃるというのと違って、教職員の現場に、英語教育だけではなくて、そういう経験を持っていらっしゃる方を入れる。資格の問題で言えば、それぞれの学科を教える、教科を教えていくというのは非常に難しいかもしれませんが、探究的な学習ということで総合的な学習の時間の中に、この市民が入っていけるような環境を作っていく。子どもたちの目を輝かせていくっていうことを考えれば、違う考え方をを持った、全く違う経験を持った先生がそこに入ってきて刺激をしてくれるということは、非常に大きなインパクトがあるんじゃないか。そのことによって、自分が今まで考えてもみなかったような未来を想像していく。こういう循環を川崎は狙っていくべきではないか、狙えるんじゃないかと思います。これは先生方に対する大きな刺激にもなると思います。先ほどの、12年間をかけてそういう業務改革が進んでいるというプランは、あくまでも叩き台であって、そういったことを刺激策として入れていくことによって川崎の強みを活かしていけるのではないかと、そのように思います。

福田市長 ありがとうございます。寺子屋の土曜日の地域での取組では、地域人材が実に生かされているんですけど、学校の中にも、そういった人達が、探究的な学びの中でうまく入り込んでもらう、イベント的ではなくて日常的に行われている環境というのは、それは素晴らしいことだなと思いますけど、教育長いかがですか。

落合教育長 まさに地域の方と一緒に活動していく時に、学校現場の管理職の目で、目の前の子どもたちを見た時に、この子たちをどう育てたいのか、良い面もあるし、ちょっと課題があるところもあるし、それも含めてどういう子どもたちを育てていきたいのか、それは学校単独だけでなく、中学校区も含めて、地域全体でこの地域の子たちにはどんな力が必要だろうとか、どんな経験をさせてあげたいのか、どういうことをしたら伸びるのかという、そこの共通理解というのをしっかりと学校現場で考えていく。それを地域住民の方と一緒に話し合っていく。そういったことが必要になってくるんじゃないかなと思っております。

森川委員 今話に出た地域住民ですけど、多分ここから先の未来の10年で地域はかなり変わると思うんですね。今まで地域教育会議や市民館のような社会教育で前面に出てやってきてくださった方が高齢化になっていらっしゃるって、私世代、その次の世代の方たちは、先ほど市長がおっしゃったように、共働きの世帯の方たちがたくさん川崎市にはいらっしゃるって、お祭り一つとっても、顧問という立場の上の方たちと、実際現場を動かす若い40代の保護者の皆様を見ていくと、多分これから見る10年はそちらの方たちがどんどん主流になっていって変わってくると思うんですね。それで、共働き世帯が多い分、仕事をしている方たちも多いので、時間はあまりないのかもしれないけれども、パソコンですとか、使えるものはどんどん使って簡単にはしていくけれども、今までやっていた集まって話さなければならないことも、どんどん数を減らすけれども、それでも結果は同じぐらいのことまで持っていったりとか、地域に対する考えとかもかなり変わってはきています。それが課題でもありつつ、今話を聞いていて希望でもあるんだと。この変わっていく10年間の地域に、このプロジェクトをうまく入れたら、すごく素晴らしい見方というというか、今の保護者の皆様の考え方を巻き込んでいけたら、すごく良いものになっていくのではないかと、そのように思います。

福田市長 地元の町会がガラッと変わってきて。世代交代がすごく進んで、年配の方もいらっしゃるんですけど、私の同年代、あるいはもうちょっと下の方たちが入ってきて、実際に動かしていて、劇的に変わっているんです。それが、町会活動をより活発化し、子どもたちを巻き込み、祭りの進化がすごいというようなことがあります。チラシがずいぶん変わったなと思ったら、デザイナーの方がチラシを作ったりだとか、得意

分野をみんなで活かし合ってすごいことになっていたんですね。

ですから、こういうことが学校を取り巻く、あるいは子どもを取り巻く環境の中で、みんながちょっとずつやり始めると、すごいことになるんだろうと思うんですけど。うまく嵌ったところはもう変わり始めたというところだと思うんですね。

一方で、寺子屋もそうですけども、本当に同じプログラムでも同じことをやっているようで、7区も違えば具体例が1校ずつ全部違うので、地域の資源とか人材を含めてあらゆるものが違うので、そこに合うようにカスタマイズをうまくしていくってことで成り立っているんだと思うんですね。だから、各校で「目指すべきビジョン」というものをしっかりと共有しながら、プログラムを具体的にはどうしていくのかっていうのは、個々にちょっとずつ違うんですけど、そういうところに意識を合わせていくと全体としては非常に良い取組ができるのではないかなと、私の方から Key Project の取組を見させていただいて、すごく良くできているなというふうな感想を持ちました。

いかがでしょうか。

坂口委員 ありがとうございます。一方でプロジェクト2「切れ目のない支援」に関して、私が素晴らしいなと思っているのは、情報が届かない人に対してちゃんと情報を届けようということが書かれていることです。発達段階に応じた切れ目のない支援で、多様な主体と連携する、多様な学びの場を提供するというところで、こんなに用意している。既にゆうゆう広場の教室など、川崎市は本当に素晴らしいことをしています。ゆうゆう広場を一度視察させていただきましたが、集まった子どもたちは、学校に行けないとしてもきちんと学びたいので、そこには学習を支援する特別の指導員という方が来てくださっており、個別の本当にマンツーマンの対応ができています。ただ、このような場があると知らないままに家庭で困っている方とか、行ったとしてもまた学校の先生に教わるんでしょう、と斜に構えていらっしゃる方とか、いろんな御家庭がある中で、でも今回の Key Project で、力を入れてやります、全面的にやりますということは、とても希望になると思います。なので、探究でまた地域がいろいろ変わっていく、Key Project 4 の生涯学習というのもだんだん充実していく、でも、人口 150 万人いますので、その中で取り残されてしまう人にどうやってリーチできるのかというのも、この Key Project 2 を中心に、その方法論をぜひ共有していただけるといいなと思います。

落合教育長 「切れ目のない支援」のところで、先ほど教員の資質という話も出ていましたけども、不登校のお子さんも増加傾向にあって、そこに目を向けたときに、これだけ増えてきているということは、まず子どもたちのメッセージというのも何かあるはずなんですよね。今の学校に合わないという。やっぱりそこに耳を傾けて、その子どもたちの声を聞く大人にならないといけないかなと感じています。これまでの学校現場というと、とにかく学校のやり方に合わせるとか、学級で言えば先生のやり方に合わせる。でもそれに合わないお子さんが実は出てきている。そういうお子さんにどう寄り添えるか、耳を傾けられるか。そういうところがすごく重要になってきていて、やっぱりそこは教員だけではなく、保護者、あるいは専門職の方を交えて、しっかり考えて、一人ひとりを救ってあげるではないですけど、それぞれ良さがあるので、そういう方たちと一緒に集団を作っていくような、そういう学校現場にしていきたいなと感じています。

森川委員 ありがとうございます。今のお話ですけど、すごく良いプロジェクトができて、探究して、切れ目のない支援をして、とできているけど、この場に子どもを入れてあげないことにはその子には届かない。先ほど坂口先生が、知らない保護者に届けたいとおっしゃいましたが、私は子どもにも届けたいんですね。自分の子どもに届いていないことに気づいていない保護者もいらっしゃって、取り残されている子どもを誰が見つけるかといったらそれは学校なんですね。学校の先生方が見つけていただくしかない。例えば子ども

食堂に関わっておりましたけども、やっぱり学校が一番子どもが来て、長くいる場所ですので、「あれ、この子」という子を見つけやすいんですね。「じゃあ見つけたときにどうしたらいいんでしょう」と若い先生に相談されたことがあるんですけど、「とにかく学校においでって。学校にさえ来れば給食も食べられるし、一緒に勉強しよう、楽しいこといっぱいあるよ、とにかく学校においでって言うことだけだよね」という話をしたことあるんです。例えば、人が人らしく生活するための最後の砦は役所の仕事だと思うんですよ。私はいつもそう思っているんですね。区役所の方や市役所の方が苦勞してやってくださっている。子どもが教育というものに対してうまく入れるか入れないかの最後の砦は学校だと思っているんですね。なので、ぜひ学校で「あれ、この子」という視点をどの先生方にも持っていて、「あれ」と思ったときに、どんどん区役所の地域支援課などに相談をしていただいて、みんなでそういう子を見つけていただいて、この現場に、この素晴らしいプロジェクトの入口に立たしてあげて欲しい。そうしたらその子自体が地域とつながっていきますし、私はいつも思うんですけど、それが税金を払える大人にする、貧困の連鎖からその子を出してあげることにつながると思っております。ぜひ教育の最後の砦は学校だと思っているので、その視点を持って、ここに子どもを立たしてあげて欲しいなと思っております。

福田市長 私は、教育委員会ではない視点で言うと、例えば不登校だとか引きこもりの状態にある子どもたちの親御さんたちが、自分の子だけが大変なんだというふうに思っておられるか、そうではなくて、これだけ多く生きづらさを感じている方たちがいるんだと思っておられるのか。親の会ってどのくらいフォローしているという話を所管に聞いたことがあるんですけど、やはり役所ではそこはあまり把握しきれないんですね。そういうところとつながっているという感覚があんまりないんです。要は、いくつも存在しているんですけど、それほど大きな規模でもないし、どこに拠点があるのかというのはネット情報、そういう感じになってしまって、あんまりちゃんとフォローできてない。そうなんですけど、実際にそういうことを相談したりして、「これって別にそんなに心配することじゃないんだ」とほっとする感覚を得られるようなサポートっていうのが実はとても大事なんじゃないかなと思うんですよ。それは発達の相談なんかと同じで、みんなで遊び場にいると「あれ、ちょっとおかしい」というふうになって、ちょっとずつ親御さんに声をかけるとかっていう、そういう支援というのが結構効いているようでして、逆に情報過多で「この子は大変なことになるかもしれない」と思っちゃる方に「いや、全然そんなことないです」というふうなことで安心して帰られる方もいらっしゃる。何となく情報共有であったり、共感する場だったりっていうふうなのを少しサポートするというのが、実は相当大事なんじゃないかなというふうに思っています。そこはやはり教育委員会とこども未来局がうまく連携をするということが大事なのではないかな、と思います。

やっぱり専門職のところは専門職ということで、上手く仕事をしていただくことによって、その子にとって良い環境に持っていく、というのが大事なのではないかなと思うんですよ。

芳川委員 話の中で今福田市長がおっしゃったことは実は第三の居場所、サードプレイスと言われているものでして、居場所づくりのところなんですけど、川崎の多様性を考えていくと、不登校の子もいて、外国にルーツのある子もいて、そして高齢者もいていろいろなそういう誰でも OK みたいな、そういう感じにしていくなのは、川崎だったらできるのではないかな、と思っています。綺麗に区切ったりせずに、誰でも OK みたいな感じにしていくな、みんながもっと気軽に入れると思います。そうでないと、ある集団で集まると、自分が不登校の親として見られてしまうとか、そういう感じがあるので、そこは何か更にできるといいなと思います。

ちょっとそこから外れますが、不登校の未然対策、未然防止ってよく言われているんですけど、県内のある市で、私はこう思っているということを伝えたことがあるのですが、不登校の未然防止は0歳から、と思っています。つまり、安定した御家庭があって、そこから子どもたちが成長していった、幼児教育・学校

教育・社会教育ってつながっていったところが、本当の意味での不登校防止なのかなと考えます。そうすると実は単に学校教育だけではなく、幼児教育も含めて、社会福祉の側面であったりとか、そこも全部含めて子どものことを考えられます。実際にその市では、市の中の福祉部門とか、現場が全部集まって、年に2回ほど、その市の子どものついてどうしたらいいのかっていうことの話をしていたりします。そういう観点でいうと、より幅広い、つまり子どもが発達・成長の中で、不登校にさせないためにはとか、あるいは発達・成長の中で、発達がどうということではなく、自然にサポートしていけるのではないかというふうに思っています。

西井委員 この課題については、教育委員会でも活発な議論をしてもらってはいるんですが、さほど多くの機会でこのテーマを議論するということにはなっていないのが現実のところだと思います。

先般、業務改善・改革の取組の対象校として、聾学校にお邪魔しまして、1時間ほど先生と話をさせていただきましたけども、聾学校は対象となる子どもたちを乳児から預かって見ておられますし、その横に中央支援学校の分教室がありますので、そこで先生方が少し様子を見ていらっしゃるということで、やはり彼らと話をすると、ものすごい対応力を持っているということが印象であります。

これは川崎の事例ではありませんが、親御さんたちの間には先生ガチャという言葉がありまして、当たるも八卦当たらぬも八卦、ガチャのようなもので、当たればすごく子どもに良い教育をしてくれるけど、当たらなければ、その状態が1年は続いてしまうという。それが普通の共通言語になっています。対応しなければいけない状態がそれぞれかなり違いますが、今はできるだけ普通教室で一緒にいるという中で、川崎の場合は非常に散りばめられているというふうに思うんですが、教育委員会がもうちょっと勉強するというだけでなく、あの知見をどういうふうに各校の先生方とネットワーキングできるか、というところ、これは今の課題でいうと、通常級の先生方があまりにも忙しすぎて、入り込めていない気がするということと、コミュニケーションが必ずしも良くないというのが印象としてあります。でも答えは持ってらっしゃると思います。その辺のテーマについて、教育委員会でももう少し議論したいなというふうに思います。

福田市長 野村委員いかがでしょう。

野村委員 私も障害を持つ子どもを育てる親として思うことですが、この切れ目のない支援ということに関しては、じゃあなぜ切れ目ができてしまうということや、一つ一つに対してフォローしていくということではなくて、その根底にかかる多様性についての捉え方をもう一度議題にあげたいなと思っています。

学校というのは、先生方もそうだし子どもたちもそうですけど、悪意の有無に関わらず、知らず知らずのうちにマジョリティにフィットした環境が自ずと作られていく、だからこそ、均一化された環境の中で、大人との出会いの多様性が少ないし、子ども同士も均一化され、カテゴライズされた中で暮らしていることでの閉塞感が生まれて、おそらくそういう無言の重たい空気が子どもたち、不登校の子どもたちにも伝わっているのではないかと。そうなってくると、通常の学校そのものも、もっと多様な人間を包摂するようなものになるべきだと思います。多様性というどうしても、何か特徴がある人とそうでない人という形に思われがちなんですけど、本当は一人ひとり全員が多様であり、そこが「多様性を可能性に」という川崎だと思うんです。そうすると、今は障害のあるお子さんと通常級のお子さんの「交流」という言葉が使われますけど、それも普段交流がないからこそ交流なんて言葉が使われるのであって、私は川崎の今後、いつかは交流という言葉が使われなくなことを望みますし、不登校とか学びの多様化学校についても、不登校の子を集めるとかいうことではなくて、どこにいてもその子が行くことも自由だし行かずに学ぶことも自由だし、というように選べるようになることが大事だと思いますし、西井委員がおっしゃったように、そうした対応力みたいなものは、もう既に本当は先生方が持っている、けれどもそれが通常の学級に降りてきていないという状

況だと思しますので、知見を通常の学級におろしていくことによって、通常のクラスがもう少し多様な大人と出会えて、多様な子どもと出会うことによって、閉塞感を打破っていったらいいかな、と思っています。

芳川委員 そういう意味では、先ほどの論点の多様性、そして多文化性について言うと、川崎は日本の教育の中でインクルーシブ教育をもうちょっと中核的に進めていいんじゃないかなと思うのですが、日本の教育の場合は、インクルーシブシステムなどと言っているのですが、どうしても中途半端な感じがあるんですけども、海外が考えているインクルーシブ教育を更に通常級の中に入れて、そこをフラットにできるような背景を川崎市は持っていると思しますので、それができるとすごく嬉しいなと思います。

森川委員 今の話を聞いていて、例えば運動のとても強く、スポーツに対して力を入れている小学校はどうしてもチームワークっていうのが出てきてしまうんですけど、そうなってくると、そこに入れない子たちはいられなくなったりして、どうしても保健室になっちゃうんですね。格差とか、そこに行けないということ、を、みんな経験したことがあるんですけども、今先生方のおっしゃったように、教員の方でも、スポーツ頑張ってくれている、運動会も出てきてくれるけども、実は、「そういうこと得意じゃないんだよね」という人達もいたりして、そうすると子どもにとっても、「そんなに乗れなくなっちゃっていいんだ、大人になっている人もいるんだ」というようになる。校長先生方が人材を発掘する時におっしゃるんですけど、風を流す、水は流すみたいに人材を動かしていかないと学校はやっていけないということを思い出していたんですけど、教員の方にも多様性があれば、「多様性、多様性」と思って仕事をするよりも、自然と多様性の方が子どもに馴染めるのかな、と思ったりしました。

福田市長 この前部活動のルールづくりについて全校から代表者が集まって議論して、すごく面白かったんですね。「そういうことも考えるのか」と思って。子どもたち、自分たちのことだから当事者としてすごいいろんな意見が出て、「そんなこと考えたことなかったな」と。早めに引退する、自分で引退時期を選択できるというのもありじゃないでしょうか、みたいな話が出た時に、確かにそれはあるかもね、という。人に迷惑はかけたくないし、でも自分でチャレンジしたい人もいるだろうしというふうな形でやると、古い言い方で言うと、昭和の時代は十把一絡げで、はいこれで一丁上がりというような大量生産的な発想から、本当にいろんな学びもそうなんですけど、個別最適な学びということと協働的な学びということ、それは部活動でもそうだしあらゆる学びに対してそうなんだろうと。そこを両立させていくということが、結果的に私たちがもっている多様性を生かすというような、そういう学びにつながっていくんじゃないかなということを皆様の話を聞きながら思いました。

自ら作るルールというのに、やはり皆さん責任を持った発言をしていて、地域の人たちも大変だからというよう発言もあり、本当に希望を感じました。

委員さん方がいろんな場に足を運んでいただいているので、その雰囲気、感覚をよくお分かりいただけているのだと思いますが、教育長いかがでしょうか。

落合教育長 我々が思っている以上に子どもたちはしっかりしています。子どもたちに任せられない、まだまだ古い考え方の教員が学校現場にいるっていうところが残念なところだと思います。私も学校現場におりましたので、もっと子どもに任せなきゃ、子どもの声を聞かなきゃ、というふうに、自分自身変わろうと努力して子どもたちを見てきましたので、本当に子どもに任せる、そういう勇気も必要かな、と思いました。

それから、野村委員が交流という言葉を使いましたが、子ども同士から見ると、もうそんな壁がないですよ。一時私が若い頃は、「支援級の子が来た」とかそういう言葉はあったんですが、私が数年いた学校は、

壁がなく、自分のクラスの仲間なんですよね。大人の方が変わっていないという。そういういろんなお子さんを含めて、自分たちがどんな学校をつくっていこうか、どんなことがやりたいか、という意見が出始めて、それを聞こうとする大人たちも増えてきています。学校現場で学校をつくりあげていくのは子どもたちだ、と。確かに子どもを指導するのは教師だけでも、作り上げるのは子どもたちであり、そういう子どもたちを支えていくような学校文化にしていきたいなと思っております。

坂口委員 それを地域にも展開できないかなって思います。芳川委員がおっしゃったように、ターゲットごとではなくて、いろんな背景ある人が、近所で集える場所が、本当は市民館のはずです。市民館のロビーとかはそういう場所のはずです。今、川崎の数々の市民館は生まれ変わろうとしていますので、そこで食事会をしてもいいかもしれないし、縁日とかをしてらっしゃるけど、もっといろんな方が参加できるようにしてもいいと思います。

一つだけ例を話すと、渋谷区に「十号のいえ」という場所があります。完全民間でやっていて、元八百屋さんの場所を、地域に開いているというコミュニティセンターです。私設の公民館と自分たちで言っていますが、どうやって運営しているかと言ったら、笹塚の駅前なので、家賃が高く、25万円くらいかかるんですが、それを25の団体で割って、月々負担しながら、その25の団体がいろんな連絡会議をしていろんなことをそれぞれ仕掛ける、そこには大学も入っていたり、地域の高齢者の団体も入っていたり、障害者の団体が入っていたりするという場所です。そんなふうに、市民館をみんなが本当に使える場所にもう一度なるといいなというふうには思います。いかがでしょうか。

森川委員 ありがとうございます。自治会長してたときに思ったのですが、場所がないっていう悩みが結構ありまして、例えばお祭りのときの場所、こども食堂の場所。場所がないという悩みのときに、分館とか市民館が浮かぶんですよ。キッチンもあるし、トイレもたくさんあるし、運動できるスペースもあるけど、勉強できるスペースもある。そしたらそこにあるって思ったんですけど、お金がかかるとか、いろんな制限があって使えなかったんですが、でも私は市民館・分館にそういったものを持ち込むと、そこで育った子どもたちが大人になったときに、地域の市民館・分館に足を運ぶハードルがすごく下がってるんじゃないかなって常々思っておりまして、何とか地元に開けた、子どもたちが気楽に「おれ帰りに寄ってきたよ」って言えるような市民館・分館にしたら、市民館・分館・図書館の未来につながるかなと思っております。

福田市長 ありがとうございます。市民館もそうですし、公共施設って公園にいたるまで、使用に対する制限って強いですね。市民館とかでも全く飲食駄目です、みたいな話っていうのは非常に使いづらい。あえてわざわざ使いづらくさせているというような、人口右肩上がり時代の、使わせないことという発想は撤回していかなければいけないですね。やっぱり行政がつくるルールというよりも、住民の皆さんで共通ルール化していきましょう。例えば公園なんかで、物販は駄目ですよと言っても、物販って言ってもいろいろありますよね、と。いわゆる商売をやるのと、例えばママさんたちや子どもたちが作ったものに対して地域で販売するということは種類が違いますよね。そういうふうなものをある意味ルールメイクするグループというのを準備段階として、役所と協議しながら使い勝手を良くしていこうという話を言っています。まだちゃんと出来ていませんが、そういうやり方をしていかないと、おっしゃるように場所がないんだけど、となった時に「場所はある、ただ使い勝手が良くない」となってしまう。あるいは使われていないスペースというのは、例えば特養の地域交流スペースがありますけど、いろいろな制限がかかっていますので、もう少しこういうような上手い使い方だったら安心して貸せるね、という、せっかく交流スペース作っていただいて使われないという無駄なスペースというようなものを、小さなエリアで地域包括ケアというふうに考えていくと、実はすごく出てくるんですよ。ですから、そういう意味で地域とはどのエリアのどういうとこ



ろを指しているのかという共通言語化をしないと、なかなか話が出てこない、具体化しないというのがあります。

そろそろお時間も来ておりますが、もう少し話しておきたいなということがありましたら御発言いただけますか。よろしいですか。では本日のまとめではありませんが、まず教育長に一言いただいてから述べさせていただきます。

落合教育長 様々な御意見ありがとうございました。こういう話し合ったことを、いかに現場に具体的に落としてあげられるか、また、それをさらに具現化していくのは学校現場だと思いますので、そういったところをしっかりと見ていきたいなと思いました。せっかくいい教育プランができつつありますので、この教育プランが本当に浸透していけば、川崎の学校に通わせたい、川崎の学校で学ばせたい。そういう人たちが出てくると、川崎で子育てしたい、川崎に住み続けたい、これがまさに地域社会を作っていくことになります。それから、ぜひ川崎で教師として子どもたちを教育していきたい、働きたいという人が増えてくると、何か子どもも大人も私が所信表明で言ったわくわくドキドキじゃないですけど、本当に子どももわくわく、大人もわくわくしながら、学び続けられるような川崎市になれるんじゃないかなと思いましたので、しっかりと社会教育も含めて、教育現場を見ていきたいと感じました。以上でございます。

福田市長 今日は皆さん活発に御議論いただきましてありがとうございました。このぐらいざっくばらんな形で御意見をいただくと、いろんな思いがあるんだなというふうに思いますし、傍聴に来ていただいている方もいらっしゃると思いますが、教育委員の皆様がどういう発言をされていてというのがよく分かったと思います。

本当にそれぞれの委員さんがそれぞれの背景がかなり特徴的にあるので、その背景を踏まえた素晴らしい御意見をいつもいただいていることに感謝申し上げたいなと思います。ぜひ今日の議論を最終的に策定するプランの中に落とし込んで、そして作ったその先が大事になりますので、それを伝えていきたいなと思っております。

西井委員が言われました、川崎で教育を受けて育って、川崎を離れたとしても、川崎を離れたところからでも川崎を思うというのって、すごいいい、じわっと来る話だなと思いました。何となく最近あまりケチくさいことを言うてはいけないなと思うんですけど、川崎がどんどん世界に羽ばたく人たちを育てようみたいなことを思っていますけど、やっぱりどこにいてもふるさと川崎を思うという、そういうことを何か感じられるような、人生の教育の過程のどこの段階でも、そういうところに一つでも二つでもつながれば、そういう教育ができていけば最高だなということを改めて思いました。本日は大変貴重な協議・調整をさせていただきました。どうもありがとうございました。

神山都市政策部長 皆様ありがとうございました。以上をもちまして、令和7年度川崎市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

14時54分 閉会